

# 赤痢

石川啄木

青空文庫



でこぼこ  
凸凹の石高路、

その往還を右左から挟んだ低い茅葺屋根が、

およ

凡そ六七十もあらう、何の家も、何の家も、古びて、穢くて、壁

が落ちて、柱が歪んで、隣々に倒り合つて辛々支へてる様に見

える。家の中には、生木の薪を焚く煙が、物の置所も分明ならぬ

くすぶ

程に燻つて、それが、日一日、破風から破風と誘ひ合つては、腐

れた屋根に這つてゐる。両側の狭い浅い溝には、檻縷片や葫蘿蔔

きれつぽし

の切端などがユラユラした泥沈んで、黝黒い水に毒茸

ひどろ

どすぐろ

の様な濁つた泡が、プクプク浮んで流れた。

駐在所の髯面の巡查、隣村から応援に來た最一人の背のヒョロ

もひとり

高い巡查、三里許りの停車場所在地に開業してゐる古洋服の医師、

いしや

赤焦あかぢやけた黒繻子の袋袴を穿いた役場の助役、消毒器具を携へた

二人の使丁こづかひ、この人数にんずは、今日も亦家毎に強行診断を行つて歩

いた。空は、仰げば目も眩む程無際限に澄み切つて、塵ひとつ一片飛ば

ぬ日和であるが、稀たまに室外そとを歩いてるものは、何れども何れも申合

せた様に、心配気な、浮ばない顔色をして、登あしおと音を偷ぬすんでる様

だ。其家そこにも、此家ここにも、怖し気な面つらがまへ構くまへをした農夫ひやくしやうや、

アイヌ系統によくある、鼻の低い、眼の濁つた、青脹あをぶくれた女な

どが門口に出て、落着の無い不格好な腰付をして、往還かみしもの上下

を眺めてゐるが、一人として長く立つてるものは無い。小供等なさ

へ高い声も立てない。時偶ときたま、胸に錐でも刺された様な赤児あかごの悲な

鳴きこゑでも聞えると、隣近所では妙に顔を顰める。素知らぬ態さまをし

てるのは、干からびた塩鱒しほびきの頭を引擦つて行く地種ぢだねの瘦犬、百年も千年も眠つてゐた様な張合のない顔をして、日向ひなたで呻あくびをしてゐる真黒な猫、往還の中央まんなかで傭つるんでゐる鶏くらゐなもの。村中湿りかへつて、巡查の沓音と佩劍はいけんの響が、日一日、人々の心に言ひ難き不安を伝へた。

鼻を刺す石炭酸の臭気におひが、何処となく底冷そこびえのする空氣に混じて、家々の軒下おびただには夥おびただしく石灰が撒きかけてある。——赤痢病の襲来かうむを蒙やまなつた山間の荒村あれむらの、重い恐怖と心痛そこびえに充ち満ちた、目もあてられぬ、そして、不愉快な状態ありさまは、一度その境を實現したんで無ければ、迎とても想像も及ぶまい。平常ひごろから、住民の衣食、住——その生活全体を根本ねづから改めさせるか、でなくば、初

発患者の出た時、時を移さず全村を焼いて了ふかするで無ければ、如何に力を尽したとて予防も糞も有つたものでない。三四年前、この村から十里許り隔つた或村に同じ疫やまひが猖獗しやうけつを極めた時、所轄警察署の当時ときの署長が、大英断を以て全村の交通遮断を行つた事がある。お蔭で他村には伝播しなかつたが、住民の約四分の一が一秋の中に死んだ。尤も、年々何どの村でも一人や二人、五人六人の患者の無い年はないが、巧に隠蔽して置いて※牛げんのしやうこ児の煎薬でも服ませると、何時しか癒つて、格別伝染もしない。それが、万一医師にかゝつて隔離病舎に收容され、巡査が家毎に怒鳴つて歩くとなると、噂ひろがの拡ると共に疫が忽ち村中に流行して来る——と、實際村の人は思つてるので、疫其者よりも巡査の方が

忌はれる。初発患者が発見つてから、二月足らずの間に、隔離病舎は狭隘を告げて、更に一軒山蔭の孤家を借り上げ、それも満員といふ形勢で、総人口四百内外の中、初発以来の患者百二名、死亡者二十五名、全癒者四十一名、現患者三十六名、それに今日の診断の結果で復二名増えた。戸数の七割五分は何の家も患者を出し、或家では一家を挙げて隔離病舎に入つた。

秋も既う末——十月下旬の短い日が、何時しかトツプリと暮れて了つて、霜も降るべく鋼鉄色に冴えた空には白々と天の河が横はつた。さらでだに虫の音も絶え果てた冬近い夜の寥しさに、まだ宵ながら家々の戸がピタリと閉つて、通行する人もなく、話声さへ洩れぬ。重い重い不安と心痛が、火光を蔽ひ、門を鎖し、人

の喉を締めて、村は宛然さながら幾十年前に人間の住み棄てた、すたれむ廃

郷らかの様に※乎ひつそりとしてゐる。今日は誰々が顔色が悪かつたと、

何れ其いづそんな事のみが住民ひとびとの心に徂徠ゆききしてゐるのであらう。

其重苦しい沈黙だんまりの中に、何か怖しい思慮かんがへが不意に閃く様に、

北のトツ端ぼづれのめの倒りかかつた家から、時々パツと火花が往還に散る。

それは鍛冶屋で、トンカン、トンカンと鉄砧かなしきを撃つ鏗かたい響が、

地の底まで徹る様に、村の中程まで聞えた。

其隣がお由と呼ばれた寡婦やもめの家、入口の戸は鎖されたが、店の

煤すすび果てた二枚の障子——その処々に、朱筆しゆふでで直した痕の見える

る平仮名の清書が横に逆様に貼られた——に、火光あかりが映つてゐる。

凡そ、村で人気のあるらしく見えるのは、此家と鍛冶屋と、南端



近い役場と、雑貨やら酒石油などを商ふ村長の家の四軒に過ぎない。

ガタリ、ガタリと重い輶くるまの音が石高路いしだかみちに鳴つて、今しも停車場通ひの空荷馬車が一台、北の方から此村に入つた。荷馬車の上には、スツポリと赤毛布を被つた馬子まごが胡坐あぐらをかいてゐる。と、お由の家の障子に影法師が映つて、張のない声に高く低く節付けた歌が聞える。

『あしきをはらうて、救けたまへ、天理王のみこと。……この世の地ぢいと、天とをかたどりて、夫婦をこしらへきたるでな。これはこの世のはじめだし。……一列すまして甘露台。』

歌に伴つれて障子の影法師が踊る。妙な手付をして、腰を振り、

足を動かす。或は大きく朦ぼんやり乎と映り、或は小さく分明はつきりと映る。

『チヨツ。』と馬子は舌鼓したうちした。『フム、また狐の真似演してら

ア！』

『オイ、お申さる婆ばあでねえか？』と、直ぐ再また大きい声を出した。恰

度その時、一人の人影が草履の音を忍ばせて、此家に入らうとしたので。『アイサ。』と、人影は暗い軒下に立留あたりつて、四辺を憚

る様に答へた。『隣の兄哥あにいか？ 早かつたなす。』

『早く帰けえつて寝る事ことだ。恁こんだ時何処うろつウ徘徊はいくだべえ。天理様拝ん

で赤痢神が取付とつかねえだら、ハア、何で医者薬いしやすりが要るものかよ。』

『何さ、ただ、お由嬢かかあに一寸用があるだで。』と、声を低めて対あ手ひてを宥なだめる様に言ふ。

『フム。』と言つた限で荷馬車は行過ぎた。<sup>きり</sup>

お申婆は、<sup>さるばあ</sup>、<sup>やが</sup>聴て物静かに戸を開けて、お由の家に姿を隠して了つた。障子の影法師はまだ踊つてゐる。歌もまだ聞えてゐる。

『よろづよの、せかい一れつみはらせど、むねのはかりたものはない。』

『そのはずや、といてきかしたものはない。しらぬが無理ではないわいな。』

『このたびは、神がおもてへあらはれて、なにか委細をとときかす。』

横川松太郎は、同じ県下でも遙ずつと南の方の、田の多い、養蚕の盛んな、或村に生れた。生家うちはその村でも五本の指に数へられる田地持で、父作松と母お安の間の一粒種、甘やかされて育つた故か、体も孱弱ひよわく、氣も因循ぐづで、学校に入つても、励むでもなく、怠なまけるでもなく、十五の春になつて高等科を卒へたが、別段自ら進んで上の学校に行かうともしなかつた。それなりに十八の歳になつて、村の役場に見習の格で雇書記に入つたが、恰度その頃、暴風らしの様な勢で以て、天理教が付近一帯の村々に入込んで来た。

或晩、氣弱者のお安が平生いっになく真劍になつて、天理教の有難い事を父作松に説いたことを、松太郎は今でも記憶してゐる。新しいと名の付くものは何でも嫌ひな旧弊家の、剩おまけに名高い吝嗇しみつた

家<sup>れ</sup>だつた作松は、仲々それに応じなかつたが、一月許り経つと、打つて變つた熱心な信者になつて、朝夕仏壇の前で誦<sup>あ</sup>げた修証<sup>しうじよ</sup>義<sup>うぎ</sup>が、「あしきを攘<sup>はら</sup>うて救けたまへ。」の御神樂歌と代り、大和の国の総本部に参詣して来てからは、自ら思立つてか、唆かされてか、家屋敷<sup>もちち</sup>所有地<sup>すつかり</sup>全体売払つて、工事費総額二千九百何十円といふ、巍然<sup>ぎぜん</sup>たる大会堂を、村の中央<sup>まんなか</sup>の小高い丘陵<sup>おか</sup>の上に建てた。神道天理教会○○支部といふのがそれで。

その為に、松太郎は両親と共に着のみ着の儘になつて、其会堂の中に布教師と共に住む事になつた。（役場の方は四ヶ月許りで罷<sup>や</sup>めて了つた。）最初<sup>はしめ</sup>、朝晩の礼拝<sup>みんな</sup>に皆と一緒になつて御神樂を踊らねばならなかつたのには、少からず弱つたもので、氣羞しく

て厭だと言つては甚<sup>どんな</sup>に作松に叱られたか知れない。その父は、半歳程経つて、近所に火事のあつた時、人先に水桶を携<sup>も</sup>つて会堂の屋根に上つて、足を這らして落ちて死んだ。天<sup>あつぱれ</sup>晴な殉教者だと口を極めて布教師は作松の徳を讃へた。母のお安もそれから又半歳程経つて、脳貧血を起して死んだ。

両親の死んだ時、松太郎は無論涙を流したが、それは然し、悲しいよりも驚いたから泣いたのだ。他<sup>ひと</sup>から鄭重に悼辞<sup>くやみ</sup>を言はれると、奈何<sup>どう</sup>して俺は左程悲しくないだらうと、それが却つて悲しかつた事もある。其後も矢張その会堂に起<sup>おきふし</sup>臥して、天理教の教理、祭式作法、伝道の心得などを学んだが、根が臆病者で、これといふ役にも立たない代り、悪い事はカラ能<sup>でき</sup>ない性<sup>たち</sup>なのだから、家を

潰させ、父を殺し、母を死なしめた、その支部長が、平常可愛がつて使つたものだ。また渠は、一体甚人を見てても羨むといふことのない。——羨むには羨んでも、自分も然う成らうといふ奮発心の出ない性で、従つて、食ふに困るではなし、自分が無財産だといふことも左程苦に病まなかつた。時偶、雑誌の口絵で繚緻の好い芸妓の写真を見たり、地方新聞で富家の若旦那の艶聞などを讀んだりした時だけは、妙に慚う危険な——實際危険な、例へば、密々<sup>こつそり</sup>とこの会堂や地面を自分の名儀に書変へて、裁判になつても敗けぬ様にして置いて、突然売飛ばして了はうとか、平常心から敬つてゐる支部長を殺さうとかいふ、全然理由の無い反抗心を抱いたものだが、それも独寝の床に人間並の出来心を起

した時だけの話、夜が明けると何時しか忘れた。

兎角する間に今年の春になると、支部長は、同じ会堂で育て上げた、松太郎初め六人の青年を大和の本部に送った。其処で三ヶ月修行して、「教師」の資格を得て帰ると、今度は、県下に各々区域を定めて、それぞれ布教に派遣されたのだ。

さらにだに元氣の無い、色いろつや沢まへうしろの悪い顔を、土埃ほこりと汗に汚なくして、小さい行李二箇ふたつを前まへ後うしろに肩に掛け、紺こんがすり紺こんがすりの単衣ひとへの裾を高々と端折り、重い物でも曳擦る様な足調あしどりで、松太郎が初めて南の方からこの村に入つたのは、雲一つ無い暑熱盛りの、恰度八月の十日、赤い赤い日そろそろが徐々西の山に沈りかけた頃であつた。松太郎は、二十四といふ齡こそ人並に喰つてはゐるが、生うまれ



来つきの氣弱者、經驗おぼえのない一人旅に今朝から七里余の知らない路  
 を辿つたので、心の髓しんまでも疲れ切つてゐた。三日、四日と少し  
 は慣れたものの、腹に一物も無くなつては、「考へて見れば目的  
 の無い旅だ！」と言つた様な、朦ぼんやり乎なりした悲哀かなしみが、粘ねばねば々ばした  
 唾と共に湧いた。それで、村の入口に入るや否や、吠えかかる瘦  
 犬を半分無意識に怕こはい顔をして睨み乍ら、脹ふやけた様な頭腦あたまを搾り、  
 有らん限りの智慧と勇氣を集中あつめて、「兎も角も、宿を見付ける  
 事ことだ。」と決心した。そして、口が自からポカンと開いたも心付  
 かず、臆病らしい眼を怯々きよろきよろ然と両側の家に配つて、到頭、村も端はづれ  
 近くなつた辺あたりで、三国屋さんごくやといふ木賃宿の招牌かんばんを見付けた時は、  
 渠かれには既もう、現世このよに何の希望も無かつた。

翌朝目を覺ました時は、合宿を頼まれた二人——六十位の、頭の禿げた、鼻の赤い、不安な眼付をした老爺おやぢと其娘だといふ二十四五の、旅疲労たびづかれの故か張合せあのない淋しい顔の、其癖何処か小意氣に見える女。（何処から来て何処へ行くのか知らないが、路銀の補助たしに売つて歩くといふ安筆を、松太郎も勧められて一本買った。）——その二人は既もう発つて了つて、穢きたない室へやの、補布つぎだらけな五六の蚊帳かやすみつの隅すみに、脚を一本蚊帳の外に投出して、仰あふけに臥ふてゐた。と、渠は、前夜同じ蚊帳に寝た女の寢息や寢返りの氣勢けはいに酷く弱い頭腦を悩まされて、夜更まで寢付かれなかつた事も忘れて、慌いてて枕の下いきなみんどひとつの財布を取出して見た。変りが無い。すると又、突然いきなみんどひとつ禪ぜん一点で蚊帳の外に跳出とびだしたが、自分の荷物は寝る時

の儘で壁側にある。ホツと安心したが、猶念の為に内部を調べて見ると、矢張變りが無い。「フフ、」と笑つて見た。

「さて、奈何為ようかな？」 恁う渠は、額に八の字を寄せ、夥しく蚊に喰はれた脚や、蚤に攻められて一面に紅らんだ横腹を自棄に掻き乍ら、考へ出した。昨日着いた時から、火傷か何かで左手の指が皆内側に屈つた宿の嬢の待遇振が、案外親切だったもんだから、松太郎は理由もなく此村が氣に入つて、一つ此地で伝道して見ようかと思つてゐたのだ。「さて、奈何為ようかな。」 恁う何回も何回も自分に問うて見て、仲々決心が付かない。「奈何為よう。奈何為よう。」と、終ひには少し懊つたくなつて来て、愈々以て決心が付かなくなつた。と言つて、発たうといふ氣は微

塵もないのだ。「兎も角も。」この男の考へ事は何時でも此処に落つる。「兎も角も、村の状態を見て来る事に為よう。」と決めて、朝飯が済むと、宿の下駄を借りて戸外に出た。

前日通行とほつた時は百二十戸も有らうと思つたのが数へて見ると六十九戸しか無かつた。それが又穢きたない家許りだ。松太郎は心に喜んだ、何がなしに氣強くなつて来た。渠かれには自信といふものがない。自信は無くとも伝道は為なければならぬ。それには、可なるべく狭い土地で、そして可成教育のある人の居ない方が可いのだ。宿に歸つて、早速亭主を呼んで訊いて見ると、案の如く天理教はまだ入込んでゐないと言ふ。そこで松太郎は、出来るだけ勿もつた体を付けて自分の計画を打ち明けて見た。

さんごくや  
三國屋

の亭主といふのは、長らく役場の使丁こづかひをした男で、

身長せたけが五尺に一寸も足らぬ

不具者かたはもの、齡は四十を越してゐるが、

髯一本あるでなし、額の小皺を見なければ、まだホンの小若者と

しか見えない。小鼻が両方から吸込まれて、物云ふ声が際立つて

鼻にかかる。それが、『然うだなツす……』と、小苦面こくめいに首を傾

げて聞いてゐたが、松太郎の話が終ると、『何しろハア。今年ア

作が良くねえだハンテナ。奈何だべなア！ 神様さア喜捨あげる錢ぜにか

金ねが有つたら石油あぶらでも買ふべえドラ。』

『それがな。』と、松太郎は臆病な眼付をして、

『何もその錢金かかの費こつる事で無えのだ。私わしは其そんなもの者で無え。自分で

宿料を払つてゐて、一週間なり十日なり、無料ただで近所の人達に聞

かして上げるのだツき、今のその、有難いお話な。』

氣乗りのしなかつた亭主も、一週間分の前金を出されて初めて納得して、それから多少言葉使ひも改めた。兎も角も今夜から近所の人を集めて呉れるといふ事に相談が纏つた。日の暮れるのが待遠でもあり、心配でもあつた。集つたのは女小供が合せて十二三人、それに大工の弟子の三太といふ若者、鍛冶屋の重兵衛。松太郎は暑いに拘らず木綿の紋付羽織を着て、杉の葉の蚊遣の煙を洩団扇で追ひ乍ら、教祖島村美支子みきこの一代記から、一通ひととほりの教理まで、重々しい力の無い声に出来るだけ抑揚をつけて諄々くどくどと説いたものだ。

『ハハア、そのお人も矢張りお嫁様に行つたのだなツす?』と、

乳児ちのみごを抱いて来た嬬かかあが訊いた。

『左様さ。』と松太郎は額の汗を手拭で拭いて、『お美支様みきが恰度十四歳に成られた時にな、庄屋敷村のお生家うちから三昧田村さんまいだむらの中山家へ御入興おこしいりに成つた。有難いお話でな。その時お持になつた色々の調度、箆笥、長持、総てで以て十四荷か——一荷は一担ひとつかつぎで、畢竟平つまりひらたく言へば十四担しじゅうたんぎ有つたと申す事ぢや。』『ハハア、有難い事だなツす。』と、意外とんだとところに感心して、『ナントお前様、此地方ここちらではハア、今の村長様の嬬かかあさま様でせえ、箆笥が唯三竿たつぎを——、否全体で三竿でその中の一竿はハア、古い長持だつけがなツす。』

二日目の晩は嬬共は一人も見えず、前夜話半ばに居眠をして行

つた小供連と、鍛冶屋の重兵衛、三太が二三人朋輩を伴れて来た。その若者が何彼なににかと冷評ひやかしかけるのを、眇めづ目の重兵衛が大きい眼玉を剥むいて叱り付けた。そして、自分一人夜更まで残った。

三日目は、午頃ひるごろ来の雨、蚊が皆家の中に籠こもった点燈頃ひともしごろに、

重兵衛一人、麦煎餅を五錢代許り買つて遣つて来た。大体の話は為して了つたので、此夜は主に重兵衛の方から、種々の問を發した。それが、人間は死ねば奈何どうなるとか、天理教を信ずるとお寺詣りが出来ないとか、天理王の命みことも魚籃觀音の様に、仮に人間の形に現れて蒼生ひとを濟度する事があるかとか、概して教理に関する問題を、鹿爪らしい顔をして訊くのであつたが、松太郎の煮切らぬ答弁にも多少得る所があつたかして、



『然うするとな、先生、（と、此時から松太郎を恚<sup>か</sup>う呼ぶ事にした、）俺にも余<sup>よつぽと</sup>程天理教の有難え事が解つて来た様だな。耶蘇は西洋、仏様は天竺、<sup>みんなわたりもの</sup>皆渡来物だが、天理様は日本で出来た神様だなツす？』

『左様さ。兎角自国のもんでないと悪いでな。加<sup>それに</sup>之何なのぢや、それ、<sup>くにとこたちのみこと</sup>国常立尊、<sup>くにのさづちのみこと</sup>国狭槌尊、<sup>とよくむぬのみこと</sup>豊斟渟尊、<sup>おほとま</sup>大<sup>く</sup>苦<sup>く</sup>辺尊、<sup>おもだるのみこと</sup>面足尊、<sup>かしこねのみこと</sup>惶根尊、<sup>いざなぎのみこと</sup>伊弉諾尊、<sup>いざなみのみこと</sup>伊弉册尊、<sup>おほひるめのみこと</sup>それから大日<sup>つきよみのみこと</sup>靈尊、<sup>とはしら</sup>月夜見尊、この十柱の神様はな、何れも皆立派な美德を具へた神様達ぢやが、わが天理王の命と申すは、何と有難い事でな、この十柱の神様の美德を悉<sup>しつか</sup>皆具へて御座る。』

『成程。それで何かな、先生、お前様めえさまは一人でも此村に信者が出来るとんだと、何処へも行かねえて言つたけが、真箇ほんとかな？ それ聞かねえと意外とんだブマ見るだ。』

『真箇ともさ。』

『真箇かな？』

『真箇ともさ。』

『愈々真箇かな？』

『ハテ、奈何して嘘なもんかなア。』と言ひは言つたが、松太郎、余り諄くどく訊かれるので何がなしに二の足を踏みたくなつた。

『先生、sonだらハア、』と、重兵衛は突然いきなり膝を乗出した。

『俺おらが成つてやるだ。今夜から。』

『信者にか？』と、鈍い眼が俄かに輝く。

『然うせえ。外に何になるだア！』

『重兵衛さん、そら真箇かな？』と、松太郎は筒抜けた様な驚喜の声を放った。三日目に信者が出来る、それは渠の全く予想しなかつた所、否、渠は何時、自分の伝道によつて信者が出来るといふ確信を持つた事があるか？

この鍛冶屋の重兵衛といふのは、針の様な髯を顔一面にモヂヤモヂヤさした、それはそれは逞しい六尺近の大男で、左の眼が潰れた、『眇目鍛冶』と小供等が呼ぶ。年齢は今年五十二とやら、以前十里許り離れた某町に住つてゐたが、鉈、鎌、鉞まさかりなどの荒道具が得意な代り、此人の鍛うつた包丁は刃が脆いといふ評判、結局は

其土地を喰詰めて、五年前にこの村に移つた。他所者たしよものといふが第一、加之それに、頑固いつこくで、片意地で、お世辞一つ言はぬ性たちなもんだから、兎角村人に親したしみが薄い。重兵衛それが平生ひごろの遺恨で、些ちよとした手紙位は手づから書けるを自慢に、益々頭が高くなつた。規定まり以外の村の費目いりめの割当などに、最先まつさきに苦情を言出すのは此人に限る。其処へ以て松太郎が来た。聴いて見ると間違つた理屈でもなし、村寺の酒飲さけのみおしやう和尚のよりは神々の名も沢山に知つてゐる。天理様の有難味も了解のみこんで了解めぬことが無ささうだ。好矣よし、俺おらが一番先に信者になつて、村の衆の鼻毛を抜いてやらうと、初めて松太郎の話を聴いた晩に寢床の中で度胸を決めて了つたのだ。尤も、重兵衛の遠縁の親戚が二軒、遙ずつと隔つた処にゐて、既とうから

天理教に帰依してるといふ事は、<sup>かね</sup>予て手紙で知つてもゐ、一昨年の暮弟の家に不幸のあつた時、その親戚からも人が来て重兵衛も改宗を勧められた事があつた。但し此事は松太郎に対して<sup>おくび</sup>噓にも出さなかつた。

翌朝、松太郎は早速〇〇支部に宛てて手紙を出した。四五日経つて返書が来た。その返書は、松太郎が<sup>いちはや</sup>逸早く信者を得た事を祝して其伝道の前途を励まし、この村に寄留したいといふ希望を<sup>ゆる</sup>聴許した上に、今後伝道費として毎月金五円宛送る旨を書き添へてあつた。松太郎はそれを重兵衛に示して喜ばした上で、<sup>か</sup>慥ういふ相談を持掛けた。

『<sup>どう</sup>奈何だらうな、重兵衛さん。三国屋に居ると何の彼ので日に十

五錢宛<sup>と</sup>貪られるがな。そすると月に積つて四円五十錢で、私は五十錢しか小遣が残らなくなるでな。些<sup>すこ</sup>し困るのぢや。私は神様に使はれる身分で、何も食物の事など構はんのぢやが、稗飯<sup>ひえめし</sup>でも構はんによつて、モツト安く泊める家があるまいかな。奈何だらうな、重兵衛さん、私は貴方<sup>わし あんた</sup>一人が手頼<sup>たより</sup>ぢやが……』

『然うだなア!』と、重兵衛は重々しく首を傾<sup>かし</sup>げて、薪<sup>まき</sup>雜棒<sup>ざつぼう</sup>の様<sup>よう</sup>な両腕<sup>こまね</sup>を拱<sup>こまね</sup>いだ。月四円五十錢は成程この村にしては高い。それより安くても泊めて呉れさうな家が、那家<sup>あそこ</sup>、那家<sup>あそこ</sup>と二三軒<sup>さんけん</sup>心<sup>こころ</sup>に無いではない。が、重兵衛は何事にまれ此方から頭を下<sup>ひと</sup>げて他人に頼む事は嫌ひなのだ。

翌朝、家が見付かつたと言つて重兵衛が遣つて来た。それは鍛

治屋の隣りのお由寡婦よしやもめが家、月三円で、その代り粟八分の飯で忍まん耐しろと言ふ。口に似合はぬ親切な野爺おやぢだと、松太郎は心に感謝した。

『で、何かな、そのお由といふ寡婦やもめさんは全くの独身ひとりずみ住かな？』

『然うせえ。』

『左様か。それで齡は老とつてるだらうな？』

『ワツハハ。心配しんぺいする事ねア無え、先生。齡ア四十一だべえが、

村一番の醜みにく婦なの巨女おほをなごだア、加それに之ハア、酒を飲めば一升も

飲むし、甚どんな男も手余てやましにする位の惡酔ぐんぼうほり語堀だで。』と、嚇かす

様に言つたが、重兵衛は、眼を円くして驚く松太郎の顔を見ると俄かに氣を変へて、

『そだともな、根が正直者だおの、結句氣樂な女せえ喃。<sup>をなご</sup>』<sup>なあ</sup>

善は急げと、其日すぐお由の家に移<sup>うつ</sup>転つた。重兵衛の後に跟<sup>つ</sup>い

て怖<sup>おづおづ</sup>々入つて来る松太郎を見ると、生<sup>なまし</sup>柴<sup>しば</sup>を大<sup>おほろ</sup>炉<sup>ろ</sup>に折<sup>をりく</sup>燵<sup>く</sup>べてフ

ウフウ吹いてゐたお由は、突<sup>いきなり</sup>然<sup>なり</sup>、

『お前<sup>めえ</sup>が、俺<sup>おらどこ</sup>許<sup>ゆる</sup>さ泊<sup>とど</sup>めて呉<sup>け</sup>ろづな?』と、無遠慮に叱<sup>し</sup>る様に言

ふ。

『左様さ。私<sup>わし</sup>はな……』と、松太郎は少<sup>すこ</sup>許<sup>し</sup>狼<sup>ろう</sup>狽<sup>た</sup>へて、諄<sup>くどくど</sup>々初<sup>はつ</sup>対<sup>たい</sup>

面の挨拶<sup>あいさつ</sup>をすると、

『何<sup>な</sup>有<sup>あ</sup>ハア、月々三両<sup>な</sup>せえ出<sup>で</sup>せば、死<sup>くた</sup>る<sup>ば</sup>までも置いて遣<sup>や</sup>べえど

ら。』

移<sup>ひつ</sup>転<sup>ころしい</sup>祝<sup>いはひ</sup>の積<sup>つ</sup>りで、重兵衛が酒を五合買つて来た。二人はお



由にも天理教に入することを勧めた。

『何有ハア、俺おらみたいな悪党あくたう女をなごにや神様も仏様も死くたる時たばで無ね

えば用えア無ええどもな。何だべえせえ、自分の居をツ家とこが然そでなかつ

たら具ぐ合あが悪わるかんべえが？ 然そだらハア、俺おらア酒さけえ飲のむのさ邪魔

さねえば、何方どつちでも可いいどら。』

と、お由は、黒漿おはぐろの剥むげた穢けい齒はを露むきだし出だにして、ワツハ、

と男の様に笑つたものだ。鍛冶屋の門かどと此の家の門に、『神道天

理教会』と書いた、丈たけ五寸許りの、硝子はを嵌はめた表札が掲げられ

た。

二三日経つてからの事、為しやうこと様事なしの松太郎はブラリと宿を

出て、其処此処に赤い百合の花の咲いた畑はたけみち徑みちを、唯一人東山

へ登つて見た。何の風情もない、饅頭笠まんぢうがさを伏せた様な芝山で、  
透迤うねくねした径みちが嶺ただしに尽きると、太い杉の樹が矗すくすく々と、八九本立  
つてゐて、二間四方の荒れ果てた愛宕神社の祠ほこら。

その祠の階段だんに腰を掛けると、此処よりは少許低目の、同じ形  
の西山に真面まともに对合むかひあつた。間が浅い凹地くぼちになつて、浮世の廃道  
と謂つた様な、塵白く、石多い、通行とほり少い往還が、其底を一直線ましくら  
に貫いてゐる。両の丘陵ふたつおかは中腹から耕されて、夷なだらかな勾配を作つ  
た畑が家々の裏口まで迫つた。村が一目に瞰下みおろされる。

その往還にも、昔は、電信柱が行儀よく列んで、毎日午近ひるくな  
ると、調子面白い喇叭ラッパの音を澄んだ山国さんごくの空氣に響かせて、赤  
く黄く塗つた円太郎馬車が、南から北から、勇しくこの村に躍込

んだものだ。その喇叭の音は、二十年來はた礎と聞こえずなつた。隣村に停車場が出来てから通行とほりが絶えて、電信柱さへ何日しか取とり除ぞかれたので。

その時代は又、村に相應な旅籠屋はたごやも三四軒あり、俵も十輛近くあつた。荷馬車と駄馬は家毎の様に置かれ、畑仕事は女の内職の様に閑却されて、旅人対手あひての渡世だけに収入みいりも多く人氣も立つてゐた。夏になれば氷屋の店も張られた。——それもこれも今は纔わづかに、老人達としよりたちの追憶談むかしばなしに残つて、村は年毎に、宛然さながら藁火の消えてゆく様に衰へた。生業なりはひは奪はれ、税金は高くなり、諸式は騰あがり、増えるのは小供許り。唯一輛残たつたつてゐた俵の持主は五年前に死んで曳く人なく、轆かじの折れた其俵は、遂この頃まで其家そこの

裏井戸の側わきで見懸けられたものだ。旅籠屋であつた大きい二階建の、その二階の格子が、折れたり歪んだり、昼でも鼠が其処に遊んでゐる。今では三国屋といふ木賃が唯一軒。

松太郎は、其そんな事は知らぬ。血の氣の薄い、張合の無い、氣病きやみの後の様な弛たるんだ顔に眩まぶしい午後の日を受けて、物珍らし相にこの村を瞰下みおろしてゐると、不図、生うまれむら村おやぢの父親の建てた会堂の丘から、その村を見渡した時の心地が胸に浮んだ。

取留のない空想が一図に湧いた。愚さの故でもあらう、汗ばんだ、生き甲斐のない顔色かほが少許色ばんで、鈍い眼も輝いて来た。渠かれは、自己おのれ一人の力でこの村を教化し尽した勝利の暁の今迄遂ぞ夢にだに見なかつた大いなる歡喜よろこびを心に描き出した。

「会堂が那処あそこに建つ！」と、屹きつと西山いただきの嶺たかねに瞳を据ゑる。

「然うだ、那処あそこに建つ！」か恁かう思つただけで、松太郎の目には、その、純まつしろ白な、絵に見る城の様な、数知れぬ窓のある、巍然ぎぜんたる大殿堂が鮮かに浮んで来た。その高い、高い天蓋やねの尖端とんがり、それに、朝日が最初の光を投げ、夕日が最後の光を懸ける……。

渠は又、近所の誰彼、見知越みしりごしの少年共を、自分が生村の会堂で育てられた如く、育てて、教へて……と考へて来て、周囲あたりに人無きを幸ひ、其等に対する時の嚴かな態度をして見た。

『抑々そもそも天理教といふものはな——』

と、自分の教へられた支部長の声色を使つて、眼前の石塊いしころを睨んだ。

『すべて、私念わたくしといふ陋劣さもしい心があればこそ、人間ひとは種々いろいろの悪あしき企画たくらみを起すものぢや。罪惡あしきの源は私念わたくし、私念あつての此世の乱れぢや。可いいかな？ その陋劣さもしい心を人間ひとの胸から攘はらひ浄めて、富めるも賤きも、真に四民平等の樂天地を作る。それが此教の第一の目的ぢや。解つたぞな？』

恁う言ひ乍ら、渠はその目を移して西山いただきの巔を見、また、凹地くぼちの底の村を瞰下した。古昔いにしへの尊いき使徒が異教人の国を望んだ時の心地だ。圧潰おしつぶした様に一一ふたならび列に列んだ茅葺の屋根、其処からは鶏の声が間を置いて聞えて来る。

習そよとの風も無い。最中過さなかすぎの八月の日光ひかげが躍るが如く溢れ渡つた。気が付くと、畑々には人影が見えぬ。恰度、盆の十四日であ

つた。

松太郎は、何がなしに生甲斐がある様な気がして、深く深く、杉の樹脂やにの香る空気を吸った。が、霎時しばらく経つと眩い光に眼が疲れてか、気が少し、焦立つて来た。

『今に見ろ！ 今に見ろ！』

這こんな事を出任せに口走つて見て、渠はヒヨクリと立上り、杉の根方を彼方あちらこちら此方わき、態と興奮した様な足調あしどりで歩き出した。と、地じ面べたに匍くつた太い木根に躓つまづいて、其機会はずみにまだ新しい下駄の鼻緒が、フツリと断きれた。チヨツと舌鼓したうちして蹲踞しゃがんだが、幻想まぼろしは迹あともなし。渠は腰に下げてゐた手拭を裂いて、長い事掛つて漸々やうやうそれを上げた。そしてトボトボと山を下つた。

穂の出初め<sup>でそ</sup>た粟畑がある。ガサ／＼と葉が鳴つて、

『先生様ア!』

と、若々しい娘の声が、突然<sup>いきなり</sup>、調戲<sup>からか</sup>ふ様な調子で耳近く聞えた。松太郎は礎<sup>はた</sup>と足を留めて、キヨロキヨロ周囲<sup>あたり</sup>を見巡した。誰も見えない。粟の穂がフイと飛んで来て、胸に当つた。

『誰だい?』

と、渠は少許<sup>すこし</sup>気味の悪い様に呼んで見た。カサとの音もせぬ。

『誰だい?』

二度呼んでも返答<sup>こたへ</sup>が無いので、苦笑ひをして歩き出さうとする  
と、

『ホホ／＼。』



と澄んだ笑声がして、白手拭を被つた小娘の顔が、二三間隔つた粟の上に現れた。

『何ぞ、お常ツ子かい！』

『ホホ、。』と再笑つて、『先生様ア、お前様狐踊踊るづア、また今夜俺と一緒に踊らねえすか？こんにや今夜から盆だず。』

『フフ、。』と松太郎は笑つた。そして急しく周囲を見廻した。

『なツす、先生様ア。』とお常は厭あくまで迄曇りのないクリクリした眼で調戯つてゐる。からか十五六の、色の黒い、晴やかな邪氣無い小娘で、近所の駄菓子屋の二番目だ。松太郎の通行とほる度、店先にゐさへすれば、屹度この眼で調戯からかふ。落花生なんきんまめの殻を投げることもあ  
る。

渠は不図、別な、全く別な、或る新しい生甲斐のある世界を、お常のクリクリした眼の中に発見した。そして、ツイと自分も粟畑の中に入った。お常は笑つて立つてゐる。松太郎も、口元に瘻<sup>きつ</sup>攀つた様な笑ひを浮べて胸に動悸をさせ乍ら近づいた。

この事あつて以来、松太郎は妙に気がソワついて来て、暇さへあれば、ブラリと懷<sup>ふところ</sup>手をして畑<sup>はたけ</sup>徑<sup>みち</sup>を歩く様になつた。わが歩いてる徑の彼方から白手拭が見える、と、渠<sup>かれ</sup>は既<sup>も</sup>うホクホク嬉しくてならぬ。知らんか振りをして行くと、娘共は屹度何か調<sup>か</sup>戲<sup>ら</sup>つて行き過ぎる。

『フフ、フフ。』

と恚<sup>か</sup>うマア、自分の威厳を傷けぬ程度で笑つたものだ。そして、

家に帰ると例いづになく食慾が進む。

近所の人々とも親みがついた。渠の仕事は、その人々に手紙の代筆をして呉れる事である。日が暮れると鍛冶屋の店へ遊びに行く。でなければ、お常と約束の場所で逢ふ。お由が何家どこかへ振舞酒にでも招よばれると、密こつそり乎と娘を連れ込む事もある。娘の帰つた後、一人ニヤニヤと可厭いやな笑方をして、炬端あぐらに胡坐をかいてると、屹度、お由がグデングデンに酔払つて、対手なしに悪言あくたいを吐つき乍ら帰つて来る。

『何だ此畜生こんちきしやうめ奴、汝うぬア何故なんしや此家ここに居る？ ウン此狐奴きつねめ、何だ？ 寝ろ？ カラ小癩ほいどな！ 黙れ、この野郎。黙れ黙れ、黙らねえか？ 此畜生奴、乞食ほいど、癩病どす、天理坊主！ 早速しらからと出て

行け、此畜生奴！』

突然、いきなり 這こんな 事を口汚く罵つて、お由はドタリと上あがり 框かまち の板

敷に倒れる。

『マア、マア。』

と言つた調子で、松太郎は、ままはは 継母あしら でも遇ふ様に、寢床の中に引擦り込んで、布団をかけてやる。渠は何日いつ しか此女を扱こつ 呼吸を知つた。悪あく 口ぐち は幾何吐いくらつ いても、別に抗争てむか ふ事はしないのだ。お由は寢床に入つてからも、五分か十分、勝手放題に怒鳴り散らして、それが息や むと、太たい 平へい な躰いびき をかく。翌朝になれば平然けろり としたものの。前夜の詫を言ふ事もあれば言はぬ事もある。

此家の門と鍛冶屋の門の外には、『神道天理教会』の表札が掲

げられなかつた。松太郎は別段それを苦に病むでもない。時偶ときたま

近所へ夜話に招ばれる事があれば、役目の説教はなしもする。それが又、

奈何どうでも可いと言つた調子だ。或時、瘦馬喰やせばくらうの嬢かかあが、小供が腹

を病んでるからと言つて、御供水おそなへみづを貰ひに來た。三四日経つと、

麦煎餅を買つて御礼に來た。後で聞けばそれは赤痢だつたといふ。

二百十日が來ると、馬のある家では、泊とまりがけ懸ばれうで馬糧ばれうの菽を刈

りに山へ行く。その若者が一人、山で病付やみついて來て医師いしやにかかる

と、赤痢だと言ふので、隔離病舎に收容された。さらでだに、岩

手県てのの山中に数ある瘦村の中でも、珍しい程の貧乏村、今年は作

が思はしくないと弱つてゐた所へ、この出来事は村中の顔を曇ら

せた。又一人、又一人、遂に忌いまはしき疫やまひが全村に蔓延した。恐し

い不安は、常でさへ巫女いたこを信じ狐を信ずる住民ひとびとの迷信あふを煽り立てた。御供水おそなへみづは酒屋の酒の様に需要が多くなつた。一月余うちの間に、新しい信者が十一軒も増えた。松太郎は世の中が面白くなつて来た。

が、漸々だんだん病勢さかんが猖獗さかんになるに従れて、渠自身も余り丈夫な体ではなし、流石に不安を感じぬ訳に行かなくなつた。其時思出したのは、五六年前——或は渠が生うまれむら村の役場に出てゐた頃かも知れぬ——或新聞で香竄葡萄酒かうざんぶどうしゆの広告の中に、伝染病予防の効能があると書いてあつたのを読んだ事だ。渠は恚ういふ事を云出した。『天理様は葡萄酒がお好きぢや。お好きな物を上げてお頼みするに病氣なんかするものぢやないがな。』

流石に巡查の目を憚はばつて、日が暮れるのを待つて御供水を貰おそなへひに来る 嬬かかあ共どもは、有な乎け無なし乎の小袋を引ひつばたたいて葡萄酒を買つて来る様になつた。松太郎はそれを儀にへづく卓あに供へて、祈祷をし、御神楽を踊つて、その幾滴を勿体らしく御供水に割つて、持たして帰す。残つたのは自分が飲むのだ。お由の家の台所の棚には、葡萄酒の空瓶が十八九本も並んだ。

奈何どうしたのか、鍛冶屋の音響ひびきも今夜は例いづになく早く止んだ。高く流るる天の河の下に、村は死骸の様に黙してゐる。今し方、提灯が一つ、フラフラと人魂の様に、役場と覺しき門から迷ひ出て、

半町許りで見えなくなつた。

お由の家の大炉には、チロリチロリと焚火が燃えて、居並ぶ種々の顔を赤く黒く隈取つた。近所の嬬共が三四人、中には一番遅れて来たお申婆も居た。

祈祷も御神樂も済んだ。松太郎はトロリと酔つて了つて、だらしなく横座よこざに胡坐あぐらをかいてゐる。髪の毛の延びた頭がグラリと前に垂れた。葡萄酒の瓶がその後あとに倒れ、漬物の皿、破茶碗かけちやわんなどが四辺に散乱ちらばつてゐる。『其そんなに痛えがす？ お由殿よしどな、寝だら可えがべす。』

と、一人の顔のしやくんだ嬬が言つた。

『何な有あ！』



慥<sup>か</sup>う言つて、お由は腰に支<sup>か</sup>つた右手を延べて、燃え去つた炉の  
 柴を燠<sup>く</sup>べる。髪のおどろに乱れかかつた、その赤黒い大きい顔に  
 は、痛みを咏<sup>こら</sup>へる苦<sup>くる</sup>痛<sup>しみ</sup>が刻まれてゐる。四十一までに持つた四  
 人の夫、それを皆追出<sup>おんだ</sup>して遣つた悪党女ながら、養子の金作が肺  
 病で死んで以来、口は減らないが、何処となく衰へが見える。乱  
 れた髪には白いのさへ幾筋か交つた。

『真箇<sup>ほん</sup>だぞえ。寝れば癒るだあに。』とお申婆も口を添へる。

『何有<sup>な</sup>！』とお由は又言つた。そして、先刻<sup>さつき</sup>から三度目の同じ弁<sup>ひ</sup>疏<sup>わけ</sup>を、同じ様な詰らな相な口調で付加へた、『晩方に庭の台木<sup>どぎ</sup>  
 さ打倒<sup>ぶんのめ</sup>つて撲<sup>ぶ</sup>つたつけア、腰ア痛くてせえ。』

『少し揉んで遣べえが』とお申<sup>まう</sup>。

『何有！』  
なあに

『ワツハハ。』  
けだる 懶い笑方をして、松太郎は顔を上げた。

『ハツハハ。酔へエばアア寝たくなアるウ、（と唄ひさして、）  
寝れば、それから何だつけ？ 呔、  
うん 何だつけ？ ハツハハ。あし  
きを攘はらうて救けたまへだ。ハツハハ。』と、再またグラリとする。

『先生様ア酔つたなツす。』と、……皺くちやの一人が隣へ囁い  
た。

『真箇ほんとにせえ。帰けえるべえが？』と、その又隣りのお申婆おさるばあへ。

『まだ可えがべえどら。』と、お由が呟く様に口を入れた。

『こら、家の嬢うち、お前は何故、今夜は酒を飲まないのだ。』と松  
太郎は再また顔を上げた。舌もよくは廻らぬ。

『フム。』

『ハツハハ。さ、私が踊ろか。否、酔つた、すっかり酔つた。ハハ。神がこの世へ現はれて、か。ハツハハ。』と、坐つた儘で妙な手付。

ドヤドヤと四五人の跽音が戸外に近いて来る。顔のしやくつたのが逸早く聞耳を立てた。

『また隔離所さ誰か遣られるな。』

『誰だべえ？』

『お常ツ子だべえな。』と、お申婆が声を潜めた。『先刻、俺ア来る時、<sup>どき</sup>巡査ア<sup>あすこ</sup>彼家へ行つたけどら。今日検査の時ア裏の小屋さ隠れたつてア、誰か知らせたべえな。昨日から<sup>きのな</sup>顔色ア<sup>つらいろ</sup>悪くてらけ

もの。』

『そんでヤハアお常ツ子も罹<sup>かか</sup>つたアな。』と囁いて、一同は密と松太郎を見た。お由の眼玉はギロリと光った。

松太郎は、首を垂れて、涎<sup>よだれ</sup>を流して、何か『ウウ』と唸つてゐる。

登音は遠く消えた。

『帰<sup>けえ</sup>るべえどら。』と、顔のしやくつたのが先づ立つた。松太郎は、ゴロリ、崩れる如く横になつて了つた。

それから一時間許り経つた。

松太郎はポカリと眼を覚ました。寒い。炉の火が消えかかつてゐる。ブルツと身顫<sup>みふる</sup>ひして体を半分擡<sup>もた</sup>げかけると、目の前にお由

の大きな体が横たはつてゐる。眠つたのか、小動ぎこゆるもせぬ。右の頬ほつべた片を板敷にベタリと付けて、其顔を炉に向けた。幽かな火光あかりが怖しくもチラチラとそれを照らした。

別の寒さが松太郎の体中に伝はつた。見よ、お由の顔！ 齒を喰絞つて、眼を堅く閉ぢて、ピリピリと眼尻の筋肉にくが痙攣ひきつけてゐる。髪は乱れたまま、衣服きものも披はだかつたまま……。

氷の様な恐怖が、松太郎の胸に斧の如く打込んだ。渠は今、生れて初めて、何の虚飾なき人生の醜惡みにくさに面相接した。酒に荒んだ、生殖作用を失つた、四十女の浅猿あさましさ！

松太郎はお由の病苦を知らぬ。

『ウ、ウ、ウ。』

とお由は唸つた。眼が開き相だ。松太郎は何と思つたか、再またゴ口  
リと横になつて、眼を瞑つぶつて、呼吸いきを殺した。

お由は二三度唸つて、立上つた氣勢けはひ。下腹が疼しびれて、便氣の塞そ  
くはく逼はに堪へぬのだ。昵じつと松太郎の寢姿を見乍ら、大儀相に枕頭まくらを  
廻つて、下駄を穿いたが、その寢姿の哀れに小さく見すばらしい  
のがお由の心に憐愍あはれみの情を起させた。俺が居なくなつたら奈何どう  
して飯を食ふだらう？　と思ふと、何がなしに理由のない憤怒いかりが  
心を突く。

『ええ此嘘吐者うそつき、天理も糞も……』

これだけを、お由は苦し気に怒鳴つた。そして裏口から出て行  
つた。

渠は、ガバと跳び起きた。そして後をも見ずに次の間に駆け込んで、布団を引出すより早く、其中に潜り込んだ。

間もなくお由は帰つて来た。眠つてゐた筈の松太郎が其処に見えない。両手を腹に支つて、顔を強く顰めて、お由は棒の様に突立つたが、出掛に言つた事を松太郎に聞かれたと思ふと、言ふ許りなき怒気が肉体の苦痛と共に発した。

『畜生奴！』と先づ胴間声が突走つた。『畜生奴！ 狐！ 嘘吐者！ 天理坊主！ よく聴け、コレア、俺ア赤痢に取付かれたぞ。』

畜生奴！ 嘘吐者！ 畜生奴！ ウン………』

ドタリとお由が倒つた音。

寢床の中の松太郎は、手足を動かすことを忘れてもした様に、

ビクとも動かぬ。あらゆる手頼たよりの綱が一度に切れて了った様で、  
暗い暗い、深い深い、底の知れぬ穴の中へ、独ぼつちの魂が石  
塊ろの如く落ちてゆく、落ちてゆく。そして、堅く瞑つぶつた両眼か  
らは、涙が滝の如く溢れた。滝の如くとは這こんな時に形容する言葉  
だらう。抑へても溢れる。抑へようともせぬ。嚙りついた布団の  
裏も、枕も、濡れる、濡れる、濡れる。……………

（明治四十一年十二月四日脱稿）

〔生前未発表・明治四十一年十一月～十二月稿〕







# 青空文庫情報

底本：「石川啄木全集 第三卷 小説」筑摩書房

1978（昭和53）年10月25日初版第1刷発行

1993（平成5年）年5月20日初版第7刷発行

底本の親本：「スバル 創刊号」

1909（明治42）年1月1日発行

初出：「スバル 創刊号」

1909（明治42）年1月1日発行

入力：Nana ohbe

校正：川山隆

2008年10月18日作成

2012年9月17日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 赤痢

石川啄木

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>